

〈第1回研究会〉(1・4・15)

二つの黄金律

立花 希一

一 研究の動機

ヘブライズムの倫理の中で最も重要な道徳的規則の一つと考えられる規則に、黄金律がある。この規則はレビ記一九章一八節に書かれている「汝の隣人を汝自身のように愛せ」という戒律の解釈から生まれたものであるが、新約聖書マタイ七章一二節「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい」、ルカ六章三二節「自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい」という定式化を通じて広く知られるようになっていく。ニュアンスの違いはあるが、基本的には「……しろ」という義務の形で定式化されており、肯定的(積極的)黄金律と呼ばれている。他方、ユダヤ教にもレビ記一九章一八節についての別の解釈があり、ラビ・ヒレルの定式化が有名である。こちらの方は「あなたにとって嫌なことをあなたの隣人にする

〔な〕⁽¹⁾とあり、「……するな」の禁止の形で定式化されているので、否定的(消極的)黄金律と呼ばれている。

この二つの定式化のうちどちらが真正の、あるいは優れた黄金律であるかをめぐってキリスト教徒とユダヤ教徒との間で論争があったが、J・H・ハーツによれば、「この論争は今日では幻想と考えられ」ており、その理由が二つ挙げられている。一つは、否定的な形式と肯定的な形式との間に存在すると考えられている微妙な相違は現代的な反省によるものであって、古代人にとっては全然明らかではなかったということ、もう一つは、最も古いキリスト教文書では、肯定と否定の二つの形式が区別なく用いられており、否定的黄金律も併せて述べられているし、他方、ユダヤ教にも肯定的形式が存在するということである。⁽²⁾

ハーツの挙げている理由は専ら文献学的なものであり、文献学的には彼の主張は恐らく正しいものであろう。しかし、古代的な論争はともかくとして、現代人にとっては、肯定的な形式と否定的な形式との間に微妙な相違が存在することを、彼自身も認めているのである。ここに論争が成立する余地がある。肯定的黄金律と否定的黄金律との間に相違はあるのか、あるとしたらどのような違いなのか、さらにまた、どちらが優れているのかについて、考察して見る必要があるように思われる。しかも、キリスト教とユダヤ教との間の論争の枠を離れて考察する必要があるのではなからうか。二つの黄金律に関する哲学的、倫理学的観点からの再考

が、今回の発表の目的であった。

ところが、黄金律に関する論文を集めながら、読み進めていく中で、この再考の意義を根底から覆えすような論文に遭遇したのである。M・G・シンガーの「黄金律」である。微妙な相違があると考えられてきた二つの黄金律の定式化に相違はない、という発言を彼はしているのである。そこで彼の主張の妥当性を検討することが先決問題となったのである。したがって、今回の発表は非常に限定された予備作業的なものであることをお断りしておかなければならない。

二 シンガーの主張の検討

シンガーは、「黄金律の肯定的形式とその否定的形式との間には有意義な相違があると通常は考えられている」という事実を指摘したうえで、「この二つは論理的に等値である」という議論を展開している。論旨は次の通りである。

- (1) 他人が自分に嘘をいうことを望まないこと (not wanting others to lie to oneself) と、他人が自分に嘘をいわないことを望むこと (wanting them not to lie to oneself) と、他人が自分に真実をいうことを望むこと (wanting them to tell one the truth) と、他人が自分に真実をいえないことを望むこと (wanting them not to fail to tell one the truth) との間には相違はない。

(2) 一般的に、「AはXが生じることを望まない」ことは「AはXが生じないことを望む」ことと等値であり、また「AはXが生じることを望む」ことは「AはXが生じないことを望まない」ことと論理的に等値 (equivalent) である。

(3) 以上の等値を仮定すれば、否定的に定式化されるあらゆる願望——これは否定的黄金律の領域に入るものである——は、肯定的に再定式化することが可能であり、したがって肯定的黄金律の領域に入ることになるであろう。

(4) したがって、一般的に、否定的原理と肯定的原理は論理的に等値である。

この議論は果たして妥当であろうか。二重否定の法則を論理法則として認める古典論理に立脚した議論を展開しているが、現在では二重否定の法則を論理法則から除外する直観主義の論理や最小論理があり、ここではこの議論は成立しないであろう。が、この点はさておき、内在的に検討することにしよう。

結論を先に述べれば、二つの定式化は論理的に完全に等値ではなく、いくつかの点で非対称性が残るのである。

(一) 先ず疑問に思うのは、「(1)における「真実をいえ」ということと「嘘をいわない」ということは同じなのだろうか」ということである。嘘をいわないのだったら、何も語らず沈黙していても構わないが、真実をいう場合には実際に真実を述べなければならぬのではないか。前者が沈黙も含意するのに対し、後者は沈黙を

含意しないという点で完全に等値ではない。シンガーはこの問題点に気が付いており、次のように主張する。「真実をいえ」というのは、「もしあなたが何かをいう場合には真実をいえ」ということである。この条件を加えれば、沈黙も含意することになり、したがって等値である。

この条件だけで等値になるであろうか。発言する場合にも、「嘘をつくな」には抵触しないが「真実をいえ」には抵触することがある。例えば、無意味なことをいうとか冗談をいうとか、回答を避けるとか、あるいは逆に質問してしまおうとかということができるが、これらは前者と抵触しないが、後者と抵触するのではないだろうか。シンガーが行っているような条件づけをさらに行えば、あるいは等値にすることができるかもしれない。

しかしこの場合でも非対称性は残る。「嘘をいうな」には全く条件が必要ないのに対し、「真実をいえ」には多くの条件が必要になるという非対称性である。

(二) 偽であると判明していないことあるいは自分では真実であると思いついて述べることは嘘をつくことではないのではないか。とするならば、ここにも非対称性がある。偽であると判明していないことを述べることは「真実をいえ」という命令とは衝突するが、「嘘をいうな」という命令とは衝突しないからである。

したがって、シンガーの(1)が成立しないので、(2)の一般的に等

値であるという主張は成立しないことになろう。

こうして、シンガーの主張に反して、否定的定式化と肯定的定式化の間には相違があり、したがって、二つの黄金律を比較検討するという研究は無意味ではないということになる。それでは一体どのように相違するのか、そしてどちらが倫理的観点からみて優れているのかについては今後の課題となろう。

- (1) I. Epstein ed. *Babylonian Talmud*, Soncino Press, London, 1935—52, *Shabbat*, 31a.
- (2) J. H. Hertz ed. *Pentateuch and Haftorahs*, Soncino Press, London, 1978, pp. 563—4.
- (3) Marcus G. Singer, *The Golden Rule*, *Philosophy*, vol. 38, no. 146, 1963, pp. 293—314.

(たぢばな・きいち、倫理学、秋田大学助教授)